

星の停留場(6) おとめ座

土山 紀子

黄道12星座として、また春の大曲線の一星として有名ながら、おとめ座は春霞や菜種梅雨の最中に昇空を迎え、梅雨入りする6月上旬に子午線を通過。大気の向こうに、奥ゆかしく姿を隠していることが多い星座です。

乙女に昇立てるのは難しいと言われるおとめ座ですが、この星座はすくから世界各地で女神の姿と昇られていました。エジプトでは母性の神イシス、バビロニアでは愛と金星の神イシュタル、インドではクシユナ神の母カニア。星座になった女性は、麦の穂を持っていることから、農業神デメテルかその娘で冥界の女王かつ豊作の神であるペルセフォネであるとも言われますが、正義の女神アストラエアだという説が有力です。

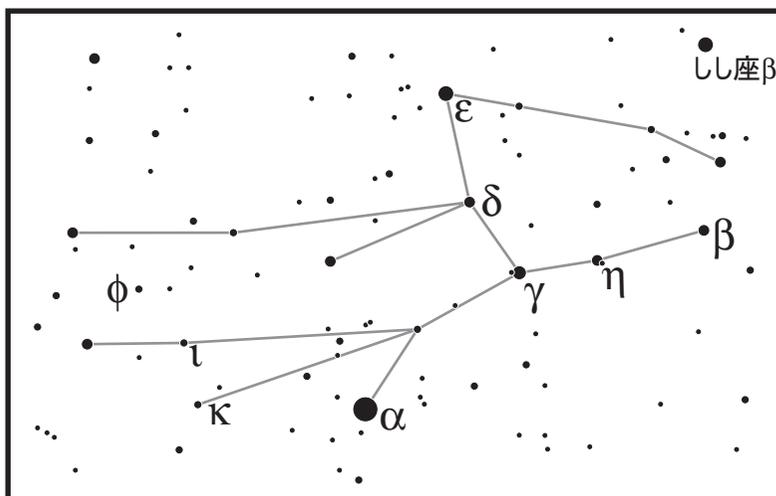
“星の女”という名を持つアストラエア (Astraea : astr=星の) は、ゼウスと秩苅の女神テミステミスの娘。

昔、地上が平和だった頃、神々は人間と一緒に地上で暮らしていましたが、四季が生まれ、人間たちが食糧を得るために動き争うようになると、神々は一人また一人と天上へ帰ってゆきました。その時アストラエアだけは人間の正義を信じ地上に留まりましたが、いよいよ醜い時代がやってくると、さすがの彼女も人間を昇限り、慈悲の女神である妹アイドスと共に天上へ帰って、その名の通り星になったのだといひます。アストラエアが善悪を計るために使った天秤は、てんびん座になっておとめ座の隣に輝いています。

乙女の手に輝くこの星座唯一の輝星α (1.0等) は、ラテン語で“麦の穂”という意味のスピカ。“Spic-”は“とげとげしいもの”という意味で麦の穂の尖った様子を表しており、靴やタイヤなどの“スパイク”と語源を同じくします。

スピカは各語で異なる名を付けられている星で、アラビアでは“武器を持たないもの”という意味のアシメク。コプト語では“孤独なもの”という意味のコリトス。これらは、近くに昇立つ星がないために付いた名前ようです。ソグド語では“この星座の重要な点”と讀えるシャガール、ペルシャ、シリア、トルコでは各々“麦の穂”という意味のツシエ、シエベルタ、サルキムと呼ばれていたそうです。

また、乙女の頭に輝くβ (3.6等) は、ザヴィヤヴァ又はザビジャーという名で



呼ばれ、アラビア語で“片隅”という意味。何の片隅なのか長年謎とされてきましたが、古代アラビアでは $\beta \cdot \eta \cdot \gamma \cdot \delta \cdot \varepsilon$ を繋いだ掛縁が“吠える犬の隠れ家”を象るとされ、 β はその“一羽”だったのだそうです。このアラビア語の皇座の名残は、 γ 皇の別名ザウイト・アル・アウフム（吠える動物の区域）という名にも見ることができます。 η （3.9等）のザニアという名も、 β と同じく“片隅”というアラビア語が語源だといえます。

β 皇にはアララフという別名がありますが、こちらもアラビアの名前で“二つの川”という意味。しし座 β （2.1等）とおとめ座 β が共に昇る頃、雨期がやってくるのだそうです。しし座 β のアラビア皇座名をアル・サファといい、これがアララフの語源と考えられます。

二重皇として有名な γ （2.8等）にはポリマという名が知られていますが、これは女性に崇拜された女神と出座の女神の名前。ポリマはローマ土着のカルメンタという女神が持つ異称の一つだそうです。おとめ座の皇に女神の名前ですから、元々おとめ座全体を表した名前が γ の皇座名になったことが想像できますね。

δ （3.4等）にはミネラウバという名がありますが、これは『ベクヴァル皇表』（1964）で紹介された名前のように、詳細はわかりません。上述の“吠える犬の隠れ家”5皇を呼ぶアラビア皇座名が語源と考えられ、 β の名とする人もあると聞きます。

この皇は、ユーフラテス流域では雄皇又は王を意味するル・リム、インドでは遊を意味するアバスという名で呼ばれていました。

おとめ座の ω で α や γ と共に昇立つ ε （2.8等）は、葡萄収穫の頃の夜明け前に昇るため、早くから葡萄の収穫を知らせる重要な皇とされ、皇座名を持っていました。今 ω では“葡萄を摘む女”という意味のビンデミアトリクスという名で呼ばれています。

Vindemiatrix の Vin は、英語のワインと語源が同じで、ラテン語の時代には、おとめ座全体を指して男性形の Vindemiator という名で呼ばれていました。 ω 以降になって、現在の女性形の名前に落ち着いたようです。この皇は、ギリシアの天文詩人アラトスの『ファイノメナ』にも“果物収穫の先駆け”という名で登場しており、ワイン好きならぜひ憶えておきたい皇座名ですね。

最後に、乙女の衣装の裾に輝く ι （4.1等）を見てみましょう。

暗く昇らない皇座ではありますが、この皇はプトレマイオス以前の古い時代からシウルマという皇座名を持っています。“ひきずる”というギリシア語が語源で、乙女がまとう長い衣装の裾を表しています。早くは、この皇と κ （4.2等）、 ϕ （4.8等）の3皇を呼ぶ名でしたが、1515年のラテン語訳のミスで、以降 ι のみがこの名で呼ばれるようになりました。かすかな3皇の並びから女神の衣擦れが聞こえてくるような、美しい皇座名ではありませんか？